



黄土高原の生活

深尾 葉子

中国西北部の黄土高原。小麦粉のように細かい土が堆積した黄土層のなだらかな起伏に、雑穀を中心とした穀物を植え、斜面に窑洞と呼ばれる、石と土でできた住居を作り、井戸に頼って生活をする。

降水量が日本の5分の1以下と言われる半乾燥地。しかも、10年のうち9年は干ばつが洪水、といわれるほど、ままならない降雨。そんな中で4千万とも6千万ともいわれる人々が生活している。歴史の重みのなかで、耕しつくされ、むき出しになった表土は風によって高く舞い上がり、雨によって削り取られてゆく。その「黄沙」は日本にも降り注ぎ、今年も北米でも観測されたという。そんな過酷な大地であるが、多くの人々を惹きつけてやまない魅力あふれる生活空間を作り出している。

まず、特徴的な住居である「窑洞」。アーチ状のファサードを持ったがっしりとした石造りのものや、先がとがったもの、イストラム圏の様式を思い起こさせるものまで様々である。また斜面に寄りかかるようにして埋め込まれた形のものから、下沈式と呼ばれるフラットな地面に四角い大きな中庭を掘り、そこから横に掘り込んでゆくものもある。これらはいずれも、断熱効果が高く、梁などに用いる木材が手に入りにくく、昼と夜、そして夏と冬の気温の差が激しいこの地域に適した優れた住宅である。

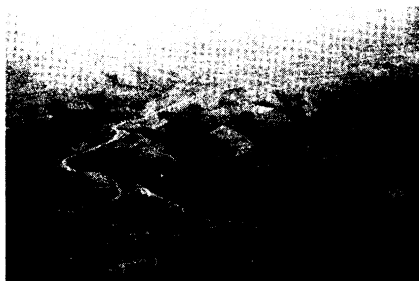
昨年我々は、陝西省北部、黄土高原の村で行ってきた調査を一冊の小さな本にまとめた（『黄土高原の村—音・空間・社会—古今書院）。特色ある景観や窑洞での生活をできる限り立体的に描こうと、音・空間・社会という異なる側面からの記述を試みたのだが、これから4回にわたるこのシリーズでは、その本で扱うことのできなかった点を中心に黄土高原の生活の魅力を紹介してゆきたいと思う。

黄土高原のマチとムラ

まず、黄土高原は、上空からみれば、ただ、大地に深く削り込まれたしわのような浸食谷が見えるばかりで、ここに村が点在しているようには思えない。見るとすれば、時折、河川の周辺に、建物らしきものが見えるだけである。

マチは必ず少し開けた河川にそってつくられる。大きなものは県城であったり、市であったりし、比較的大きな「公路」が間を貫いて走っている。このマチは「城」と呼ばれ、また少し小さなものは「街」と呼ばれたりする。この「街」は方言音では、「ガイ」と発音される。古漢語のなごりである。河川によってひらかれた空間にこのマチが散在するのに対して、舗装された「公路」から少しそれて、細い浸食谷のなかに分け入ると、その瞬間からそこはムラ

団地



黄土高原の景観。浸食谷が深くけずりとられていたが、ここでは道路は平地の上をはしっている

の世界となる。それは「郷」と呼ばれるいわゆる「農村」である。道は大半が「土路」となり、起伏も多く、車などは一転してももうたる煙を上げて進むことになる。

浸食谷は、より大きな支流に対し、小さな支流、それに対してまた小さな支流というように同形相似が繰り返す形となっている。我々調査団はこれを魚の骨モデルと呼び、同地を訪れた経済学者はフラクタルと呼んだ。まさにそんな、浸食谷の入れ子構造の、あるレベルが行政村となり、そのさらに下位のレベルが自然村となっている。「郷」政府の所在地などは、この浸食谷の合流地点に多い。

こうした空間の中に生活する人々は、その日常の大半を山の上にある棚田と、斜面の中腹にある住居、河のほとりや谷に近く掘られている井戸、などを往復して過ごす。そしてその合間に、人々の集まる村の溜り場に立ち寄って、よもやま話をする。商売をする人は、近年はトラクターか三輪（オート三輪のような乗物）で、開けた平地の街まで一日一往復し、多くの場合、マチの情報の運び手となる。この他、羊の放牧をする人は、一日の大半をこの高原を見渡しなが羊とともに過ごす。こうした日常の他に、年に数回、県城に出かけたり、



黄土高原の住まい「窑洞」

あるいは、遠くの廟まで廟会に出かけたりするのが、わずかな「遠出」の機会である。また、県城に出るのは、年寄りなどは、親戚でもない限りほとんどなく、子供たちは高校進学などでマチの世界を初めて知ることもある。

ただ、村の人の一生が、これらの空間に限られるのかというと、意外とそうではない。村の老人や若者を含め、ほとんどの人が出稼ぎなどの形で、遠くのマチや、近隣の省で生活した経験を持つ。ジャガイモを売りに行ったり、「当兵」したり、また、親類を訪ねて、大都市の西安や北京を訪れたりするのである。西北地帯の特徴として、出稼ぎで南方にゆくというのは極めてまれで、山西省や、寧夏回族自治区、新疆、あるいは内モンゴルなど西北地域内で流動することが多い。

こうして、外の世界を見た人も、再び故郷の村へ帰り、自然に村の風景に溶け込んで、おしゃべりに興じたりしている。過酷な生活条件とはいえ、「退休後」あるいは死ぬ時はやはり黄土高原に還りたい、と願う人は少なくない。窑洞の生活空間とは、そんなすべてを包み込むような安堵感を与えてくれるのである。

（ふかお・ようこ 大阪外国語大学）